

能登半島地震で罹災された皆様へ

能登半島地震によって、犠牲になられた方々並びに、御遺族の皆様衷心より哀悼の意を表しますとともに、罹災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます。

さて、私は甚大な被害を被った震災を眼のあたりにし、佛法に説かれる「無常」を想起しつつ、「真宗王国」である北陸の皆様の中に五百年の永きにわたって生き続ける蓮如上人の次の「白骨の御文」に思いを寄せて、尊い生命を落とされた方々の追悼と、深い悲しみに包まれた皆様のお心に寄り添い、日々、東本願寺東山浄苑に於いて法要を厳修しております。

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、凡そはかなきものは、この世の始中終、幻の如くなる一期なり。

されば未だ万歳の人身を受けたりという事を聞かず。一生過ぎ易し。

今に至りて、誰か百年の形体を保つべきや。

我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、おくれ先だつ人は、本の雫・末の露よりも繁しといえり。

されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。

既に無常の風来りぬれば、すなわち二の眼たちまちに閉じ、一の息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて桃李の装を失いぬるときは、六親・眷属集りて歎き悲しめども、更にその甲斐あるべからず。

さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。

あわれというも中々おろかなり。

されば、人間のはかなき事は老少不定のさかいなれば、誰の人も、はやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。

震災によって亡くなられた方々に改めてお悔やみを申し上げるとともに、苦渋の生活を強いられる罹災者の皆様に於かれては、どこまでも佛法にお心懸け下さり、佛祖の御冥祐の下、一日も早く復興されることを心より願ってやみません。

合掌

令和六年一月十八日

本願寺法主

東本願寺東山浄苑主

本願寺文化興隆財団理事長

大谷 暢順